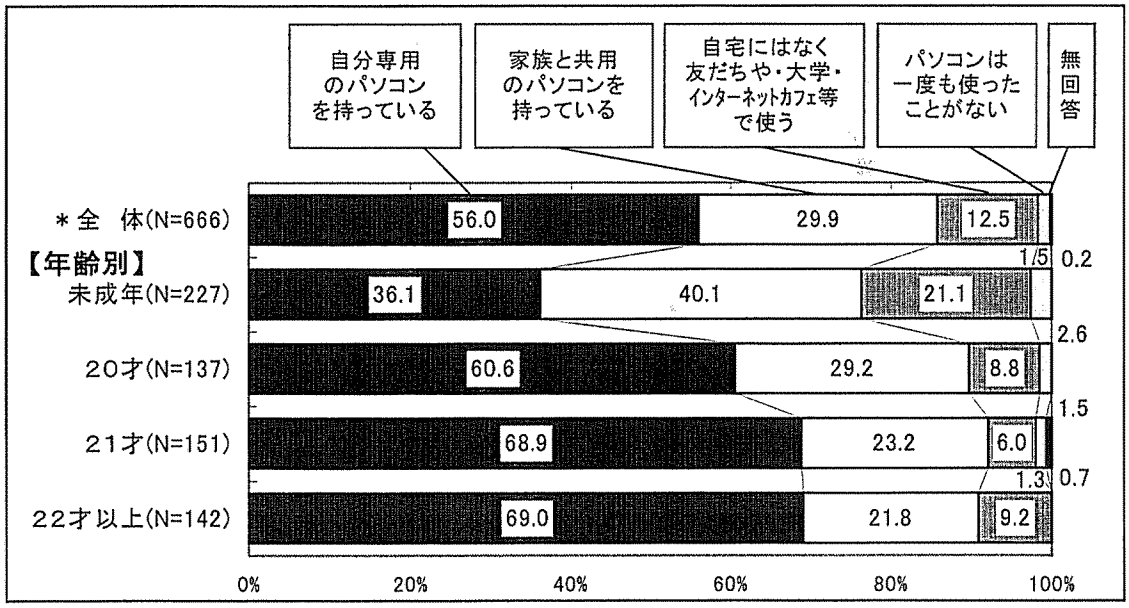
（３）インターネットの利用

①　パソコン所有状況

現在「自分専用のパソコンを持っている」者が最も多く、全体の半数を超える。これに「家族と共用のパソコンを持っている」者（約３割）を加えると、８割以上が手近に利用可能なパソコンを所有していることになる。一方、「パソコンを一度も使ったことがない」と答えたものはごく少数で、しかもそのうちの８割までが「使ってみたい」希望を持っている。大学生にとってパソコンは、生活必需品とも言うべき存在になっていると言えよう。

この質問と、すぐ後に紹介するインターネットの利用時間帯に関する質問に対する回答だけは、調査対象となった東洋大学生と立正大学生との間でやや異なった傾向を見せている。「自分専用のパソコンを持っている」者の比率は、東洋大学生で６割に対して、立正大学生では４割である。そして、「他のところにあるパソコンを使う」と答えたものは、東洋大学生では１割にも達しないが、立正大学生では４人に１人以上となっている。この原因の一つは、両大学生の間の年齢構成の違いにあると考えられる。つまり、パソコン専有者の割合は、未成年者と２０歳以上とで大きく異なっており、立正大学生の半数が未成年者だということである。つまり、両校の間に見られるパソコン専有者の比率の差は、学校差というよりも年齢差によるものと考えられるのである。

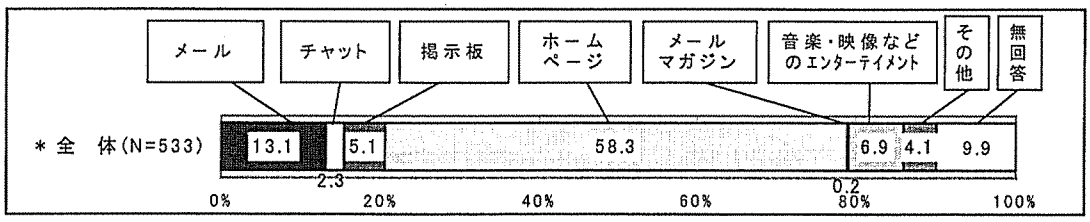
（図表 12）パソコンの所有状況



② インターネットの利用実態

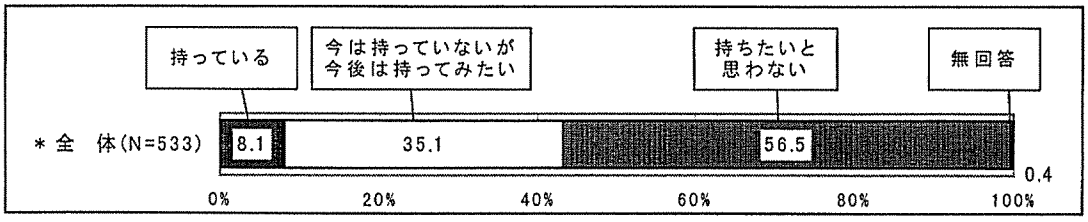
パソコンは単体として数値計算や文書作成にも用いられるが、より一般的な用途はインターネットを介しての「メール交換」や「ホームページ閲覧」であろう。ただ今回の調査結果で見ると、「メール」の送受信は意外に少なく２割にみたず、「ホームページ」の利用が７割と圧倒的である。さきに携帯電話の利用目的が「メールの送受信」に集中していることを見たが、確かに、移動中を含めていつでも身に付けておくことの出来る携帯電話はメールに適しているし、腰を落ち着けてホームページを検索するにはパソコンの方が適している。若者たちはそれぞれの機器の特長に応じて新しいメディアを活用しているのであろう。

（図表 13）インターネットの利用上の最大目的



なお、自分のホームページを作成して持っている者はまだ１割にもみたない。したがって彼らが「ホームページ」利用というとき、それは発信者としての利用ではなくて圧倒的に閲覧者としての利用といえる。ただ、現在はホームページを持っていないが「今後は持ってみたい」と考えている者が３５パーセント前後いることは注目に値しよう。

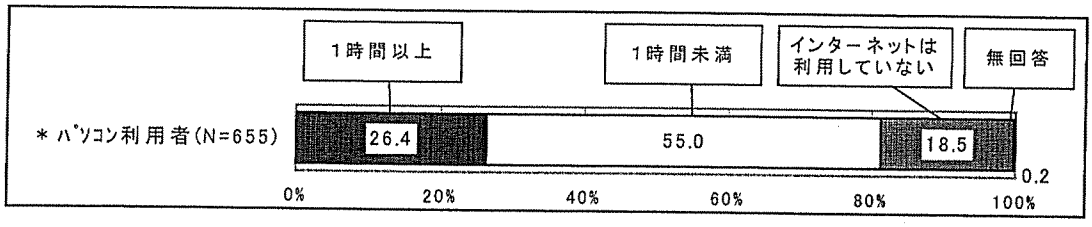
（図表 14）個人ホームページの開設状況



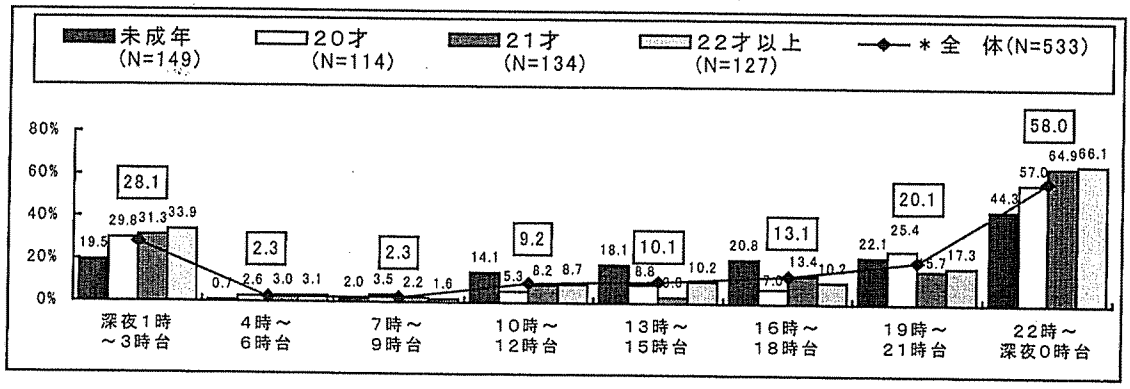
彼らがインターネットを利用する時間量は「１日１時間未満」の者が過半数で、１時間を超えて利用しているものは４分の１強であった。利用する時間帯についてみると、１日２４時間の間、常に誰かがインターネットを利用していることが分かった。まさにインターネットは時刻に制限されず好きな時にいつでも利用可

能なメディアである。しかも利用者が最も多い時間帯は、午後１０時から夜中の３時台までの間で、男女差や居住形態（一人暮らしか家族と同居しているか）による違いは殆ど見られない。ただ年齢による傾向の差は比較的顕著にみられ、特に未成年者と成人とを比べてみると、午前１０時から午後１０時までは未成年者の利用者率の方が高いが、午後１０時過ぎから深夜帯にむかっては、成人の利用者率の方が高くなる。そしてこの傾向は、さきにふれた東洋大学生と立正大学生の間の利用時間帯のズレに反映している。

（図表 15）普段一日のインターネット利用時間



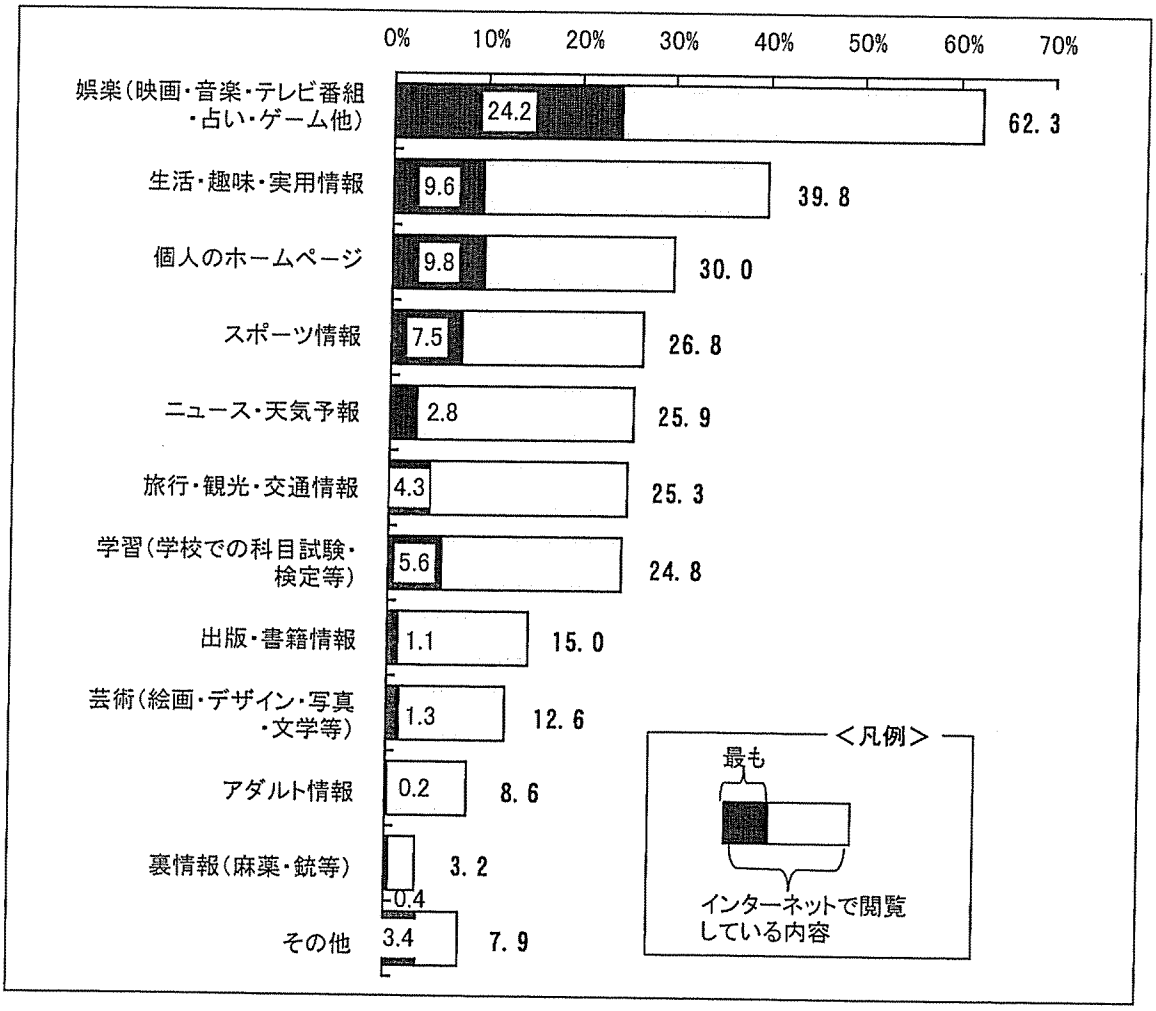
（図表 16）主なインターネットの利用時間帯



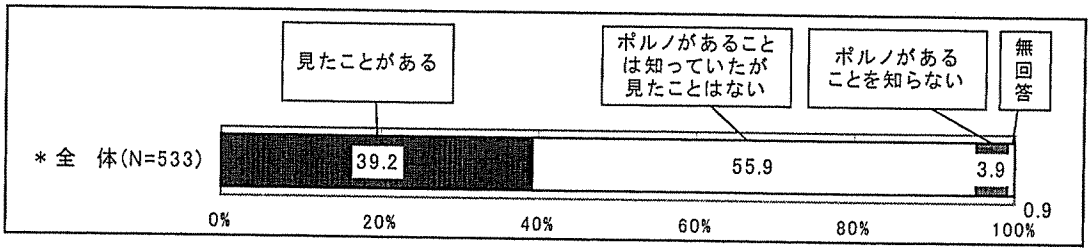
では、彼らはインターネットでどんなホームページを見ているのだろうか。最も多くの者がアクセスしているのは「娯楽情報」で、映画、音楽、テレビ番組、イベントなどの紹介から、占い、ゲームなどまでが含まれる。次いで「生活・趣味・実用情報」そして「個人のホームページ」と続く。現在自分自身のホームページを持っている者はごく少なかったが、開設希望者が多く存在していたことと思い合わせると、これからのインターネットが個人間のコミュニケーションのメディアとして重要な位置を占めるであろうことが推測される。このほか「スポーツ情報」「旅行・観光・交通情報」などが比較的人気のあるホームページであり、前者は男性に後者は女性により好まれている。「アダルト情報」と「（麻薬・銃などの）裏情報」に関しては普段アクセスしているものはごくわずかであるが、男性に限ってみると、「出版・書籍情報」にアクセスしている者よりも「アダルト情

報」を見ている者の割合の方がやや多い傾向がみられる。ちなみに、インターネットでポルノ画像を見たことのある者は男性の6割であり、その反応としては「驚いた」「興奮した」「このまま見続けていいのかと思った」などの感想が上位を占めている。

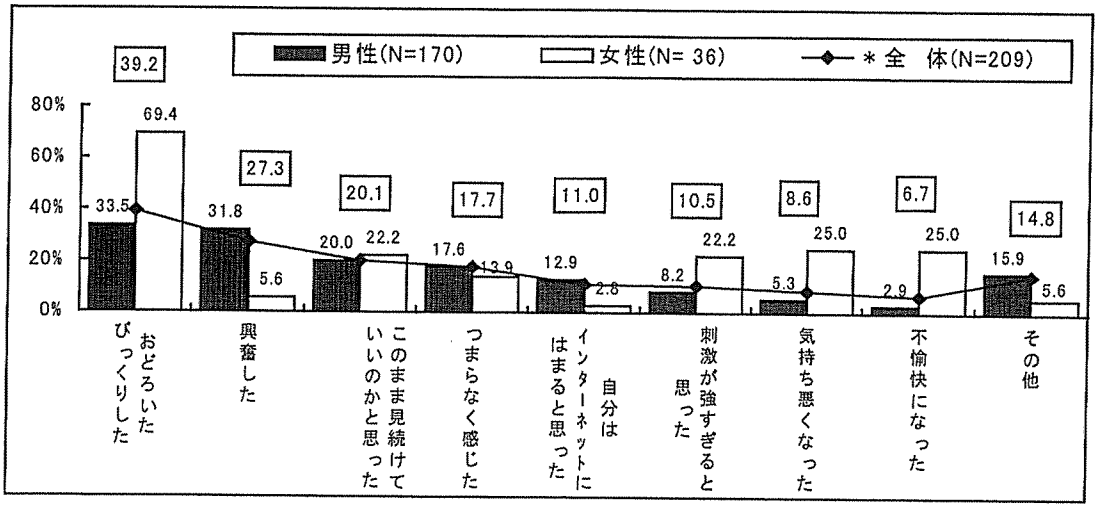
（図表 17）インターネットの閲覧内容



（図表 18）インターネットによるポルノ画像の閲覧



（図表 19）インターネットによるポルノ画像を初めて見た時の感想

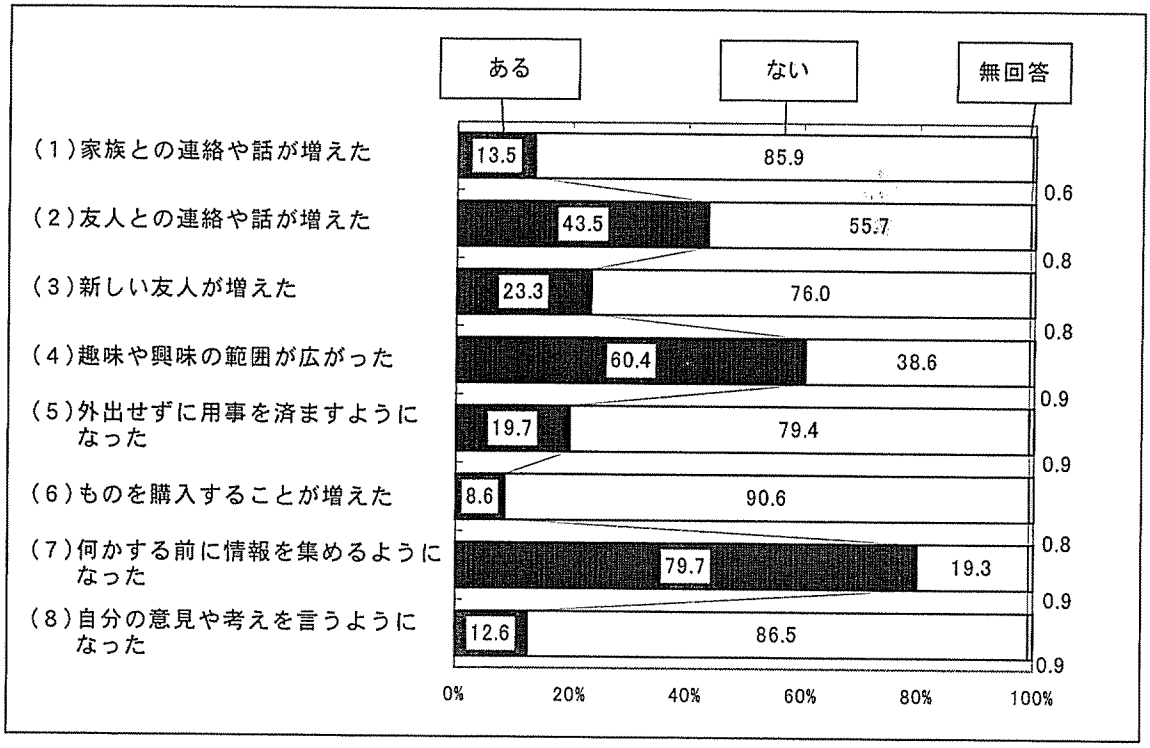


③　インターネットの評価

（ｉ）　インターネット利用に伴う生活変化

インターネットを使うようになってから生活の上にどんな変化が生じたと思うかを、８項目についてたずねた。結果は図表 20 のとおりである。

（図表 20）インターネット使用後の変化



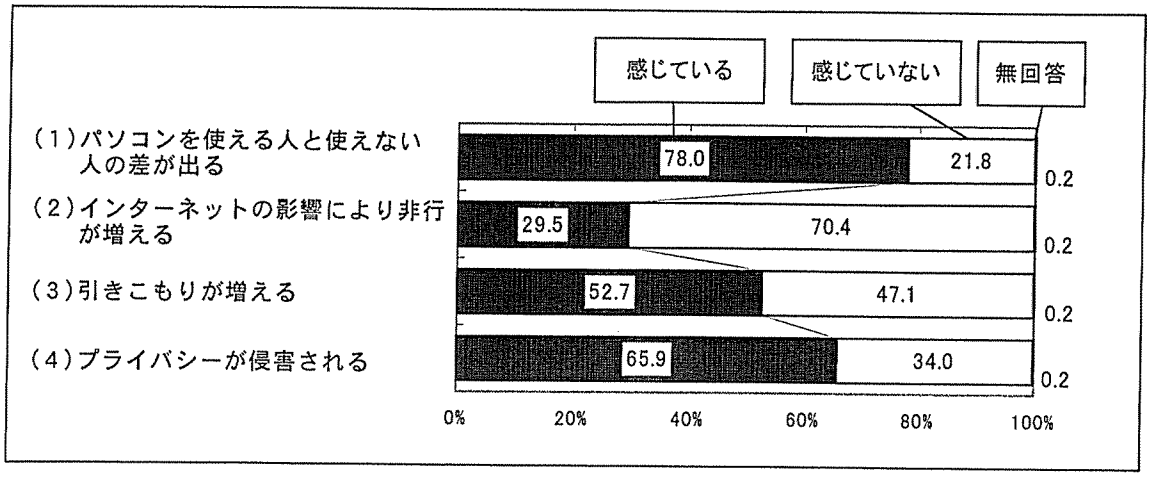
最も多くの回答者が認めている変化は「何かをする前に情報を集めるようになった」ことであり、ついで「趣味や興味の範囲が広がった」こと、「友人との連絡や話が増えた」ことなどが、比較的多くの回答者に自覚されている。前2者はホームページの検索に伴って生じた変化であり、特にインターネットの最大のメリットの一つとされている情報収集の迅速さと簡便さは、多くの利用者の生活行動を確実に変えつつあるといえよう。これに対して、しばしば話題の種になっているインターネット・ショッピングの習慣は、調査対象が大学生ということもあってか、喧伝されているほどには浸透していないようである。また、インターネットを媒介とした新しい人間関係の発生といったことが、「情報縁」などという言葉で論じられているが、今回の調査でみる限り「新しい友人が増えた」と答えたものは2割強で、むしろ従来の友人との間のコミュニケーション機会の増大を深めているものが4割を超えていた。
以上の知見は、性、年齢、居住形態などの属性を通じて一貫してみられた傾向である。

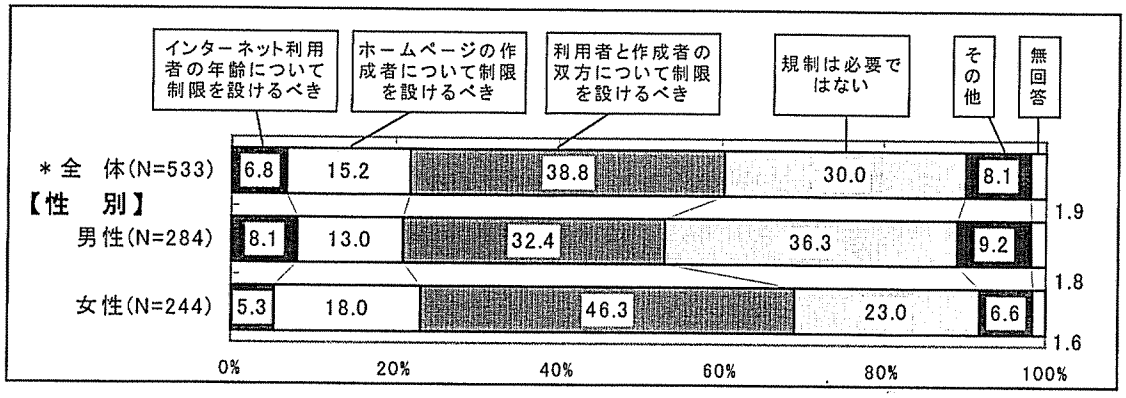
（ii） インターネットの社会的影響評価

インターネットの導入は個人の生活の上に様々な変化をもたらすと同時に、社会的にもプラス・マイナス両面において少なからぬ影響を及ぼしている。今回の調査では、マイナス面の影響に関して大学生がどのような認識を持っているかを、4項目についてたずねた。このうちの2項目は、一般に指摘されている「テクニカル・デイバイド」と「プライバシー侵害」への危惧であり、他の2項目は非行との関連で、「非行の増加」と「引きこもりの増加」に対する懸念である。

結果は、図表21に見るように、「テクニカル・デイバイド」と「プライバシー侵害」について7割から8割近くが懸念を示しており、マスコミなどに度々登場する論評をある程度反映しているものと思われる。これに対して、「非行の増加」を案じているものは3割ほどで、7割のものは否定的である。「引きこもりの増加」については肯定・否定が半々に分かれている。

（図表 21）インターネットが社会に及ぼす影響



最後に、インターネットの利用に関して何らかの年齢的制限を設けるべきか否かをたずねたところ、6割が「制限を設けるべき」だと答え、3割が「規制は必要ではない」と答えている。性別で見ると女性の方がやや「規制派」の比率が多いようである。

（図表 22）インターネットに対して必要と考える規制